

☆待降節第3主日(12月17日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (イザヤの預言 61章 1-2a、10-11 節)

主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。
わたしを遣わして、貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。
打ち砕かれた心を包み
捕らわれ人には自由を
つながれている人には解放を告知させるために。
主が恵みをお与えになる年
わたしたちの神が報復される日を告知させるために。
わたしは主によって喜び楽しみ
わたしの魂はわたしの神にあって喜び躍る。
主は救いの衣をわたしに着せ
恵みの晴れ着をまとわせてくださる。
花婿のように輝きの冠をかぶらせ
花嫁のように宝石で飾ってくださる。
大地が草の芽を萌えいでさせ
園が蒔かれた種を芽生えさせるように
主なる神はすべての民の前で
恵みと栄誉を芽生えさせてくださる。

答唱詩編 (ルカによる福音書 1章 46-55 節)

わたしは神をあがめ、神の救いに喜びおどる。
わたしは神をあがめ、わたしの心は神の救いに喜びおどる。
神は卑しいはしためを顧みられ、いつの代の人もわたしを幸せな者とよぶ。
神はわたしに偉大なわざを行われた。
その名はとうとく、あわれみは代々、神をおそれ敬う人の上に。

神はその力を現わし、思いあがる者を打ちくだき、
権力をふるう者をその座からおろし、見捨てられた人を高められる。
飢えに苦しむ人はよいもので満たされ、
おごり暮らす者はむなしくなって帰る。

神のあわれみは代々、神をおそれ敬う人のうえに。

わたしたちの祖先、アブラハムとその子孫に約束されたように。
栄光は父と子と聖霊に。初めのように今もいつも世々に。アーメン。

第二朗読(使徒パウロのテサロニケの教会への手紙 5章 16-24節)

皆さん、いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。“霊”の火を消してはいけません。預言を軽んじてはいけません。すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい。あらゆる悪いものから遠ざかりなさい。

どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてくださいます。

福音朗読 (ヨハネによる福音書 1章 6-8、19-28節)

神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

さて、ヨハネの証しはこうである。エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、あなたは、どなたですか」と質問させたとき、彼は公言して隠さず、「わたしはメシアではない」と言い表した。

彼らがまた、「では何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「違う」と言った。更に、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねると、「そうではない」と答えた。そこで、彼らは言った。「それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか。」ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。

「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。

『主の道をまっすぐにせよ』と。」

遣わされた人たちはファリサイ派に属していた。彼らがヨハネに尋ねて、「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を授けるのですか」と言うと、ヨハネは答えた。「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない。」これは、ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であった。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

待降節ももう第三主日を迎えました。今日、司祭はピンクの祭服を着ています。いつもの紫色でもいいのですが、典礼の総則書には「そのような習慣のあるところではピンクの祭服も着用できる」とあります。それで、その習慣を作ろうとピンクの祭服を使い始めたわけです。これには訳があります。今日の主日の集会祈願に「喜びの源である父よ」、「喜びのうちに降誕祭を迎え」とあるのです。そしてこの主日は「喜び(ガウデーテ)の主日」とも言われているのです。待降節は四旬節と同じ紫色の祭服が基本ですが、その過ごし方の特徴は四旬節の回心と苦行という少し暗いイメージではなく、待ちに待った救い主が来られる喜びが前面に出されていることなのです。父なる神が長い歴史を通して約束されてきたことがとうとう成就する時なのです。入祭唱には「喜べ、主は近づいておられる」とあります。

第一朗読（イザヤの預言 61章 1-2a、10-11 節）

この預言書ではイエスの誕生ではなく、救い主が現れるときにはどんなことが起こるかについて述べられています。救い主が来ると「貧し人に良い知らせが伝えられ」、「打ち砕かれた心が包まれ」、「繋がれている人には開放が」告げられるのです。この言葉はまさにイエスが会堂で聖書を手にして読まれた箇所そのものです（ルカ4. 16-21）。イエスはこの箇所を開いて読むことで今まさに神の救いが来たことを当時の人々に宣言されたのです。

答唱詩編（ルカによる福音書 1章 46-55 節）

喜びの主日らしくイエス・キリストの母となったマリアがエリザベトを訪問した時に歌った歌が採用されています。マリアは自分に与えられて神の恵みを思い、喜びの心で歌っています。

第二朗読（使徒パウロのテサロニケの教会への手紙 5章 16-24 節）

ここでもパウロの喜びに対する考えが述べられています。「いつも喜んでいなさい」。これはキリスト信者にとってとても大事な心の持ち方です。「救いは近い」からです。多くの殉教者たちも喜んで死を受け入れていました。日本のクリシタンたちも十字架に磔になる前に喜びを表していました。今の私たちはどうでしょうか。苦しい表情をしていませんか。苦しい人の表情に誰がついて行くでしょうか。福音は喜びの福音なのです。

福音朗読（ヨハネによる福音書 1章 6-8、19-28 節）

先週の福音に続いて「荒れ野に叫ぶ声」としての洗礼者ヨハネが登場します。ヨハネは言います。「自分は救い主ではない」と。救い主の到来を準備するものだ。人びとは期待が外れがっかりしたでしょうが、ヨハネは違います。救い主キリストがあなたたちの中にいるのを私は知っている。その人と関係づけられるだけで私は喜ばしいのだ。人は他人と比較されて格下に見られるのを嫌がるものですが、洗礼者ヨハネは自分の役割をしっかりと果た

すことに喜びを感じているようです。見習いたいものです。



足立サレジオ幼稚園の馬小屋飾り（2022年）

P.S.

今週はとても寒くなる予報が出ています。体調管理に努めましょう。16日には東京教区の補佐司教レンボ司教様が誕生されました。お祝いするとともにそのお仕事の上に神さまの豊かな恵みを祈りましょう。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光